

## 論文

# スクリーンに生きる英雄

— 黄飛鴻映画をめぐって —

彭 偉 文  
PENG Weiwen

### はじめに

黄飛鴻は清末民初を生きた広東の武術家で、広東醒獅<sup>(1)</sup>の名人である。1850年（生まれた年について、1847、1856などの諸説がある）<sup>(2)</sup> 広東省南海県（現在では広東省佛山市南海区）西樵鎮官山圩の禄舟村に生まれたとされ、若い頃から父とともに、広東省の二大都市である広州と佛山を回って売武という、街頭で武芸を見世物として生計を立ててきたが、のちに広州で武館（日本における町道場にあたる、市中にある武術を教える道場のこと）と打撲専門の医院を開き、多くの弟子を育てたほか、名医とされたという。1924年に広州商団事件<sup>(4)</sup>に遭い、医院とすべての財産を火事でなくし、大きな打撃を受け、まもなく広州で没した<sup>(5)</sup>。父の代から武名が高く、その父の黄麒英が、「広東十虎」と称された清末民初の広東におけるもっとも有名な武術家の一人である<sup>(6)</sup>。

現在の中国では、黄飛鴻ほど知られる広東の武術家がいないうえ、時の潮にもっとも敏感に反応するインターネットのデータを見てみよう。2010年12月11日現在では、黄飛鴻の名前を中国で最大手の検索サイトである百度で検索すると、引っかかったインターネット記事は約7,960,000件である。これに関連して、「広東十虎」の中でインターネットでもっとも多く関心を集めたのは蘇乞児で、4,150,000件であった。さらに、黄飛鴻の師匠の師匠にあたる鉄橋三には、約175,000件のインターネット記事が見られ、黄飛鴻との間に大きな差がある<sup>(7)</sup>。

そして、黄飛鴻は一つの世界記録を持っている。1949年に一本目が誕生してから、1996年までの50年近くの間、計100本の作品が作られ、世界一の長寿シリーズとされ、「黄飛鴻映画」という言葉ができるほど、黄飛鴻を主人公とした映画が香港映画の歴史に重要な位置を占めているのである。かれは香港の映画関係者にもっとも愛される男と言ってもよからう。「清末の衰微の世と激動の民初を生きた一人の尋常な武術家」<sup>(8)</sup>に過ぎない黄飛鴻は、これらの映画で、「若い頃に珠江デルタを転々として売武することも見られなく、現実の世界で遭った妻と息子を無くした痛みも見られない。……かれは超越した英雄として、あるいは俠士として姿を見せている。早期の小説においても、のちに作られた映画においても、かれは俠気に満ちて義理固く、人を危険から助け窮地から救い、優しい父であり厳しい師匠である。またかれは、民族の節操を守り、自尊自立の若い俠士として現れることもある。いずれにせよ、かれのイメージは歴史の中で積み重ねられ、ついに中華民族の伝統美徳の代表となった<sup>(9)</sup>」と言われるように、実在した人物でありながら、スクリーンに生きる英雄である。

黄飛鴻映画に関する先行研究をまとめてみれば、その香港映画の歴史における重要性に相応しく、

香港の映画研究者による黄飛鴻映画に関する研究は多々あるほか、資料も非常に充実していることがわかる。映画のタイトルをはじめ、製作・上映の時間及び監督、役者、製作会社などについての詳細なリストはもちろん、さまざまな形で黄飛鴻映画に携わった人へのインタビューも多く残されている。しかし残念ながら、これらのインタビューを活かして黄飛鴻映画を研究した成果は多いとは言えない。その多くは、黄飛鴻映画をいくつかの段階に分けてその特色を述べただけである。その中で、ベテランの香港映画史研究家の余慕雲による黄飛鴻映画の歴史についての整理、特に関徳興が主演を務めた早期の作品に見られる儒俠としての黄飛鴻についての指摘が注目に値する<sup>(10)</sup>。ほかに、蒲鋒の「飛鴻那復計東西——黄飛鴻電影的轉變歷程」は、黄飛鴻映画を香港の社会的・歴史的背景においてその変化を論じたものであり、非常に面白い研究である<sup>(11)</sup>。だが、この研究は他者の視角からの黄飛鴻映画への解釈ということにはほとんど変わりがない。

しかし、黄飛鴻は、もともと映画で作られた架空の人物ではない。多くの弟子を育て、その門人は黄飛鴻映画の製作に深くかかわっただけではなく、のちの香港カンフー映画に多大な影響を及ぼした。これらの黄飛鴻の流れを汲んで黄飛鴻映画を支えた人たちは、最初は映画界の人間としてこの仕事に携わったのではない。かれらは本来、武館を開いた武術家としての黄飛鴻のもとに集まり、それぞれの本業を持つ労働者であって、映画業界ではなく、かれら自身の行動原理に従って行動したものである。このような行動原理は、黄飛鴻映画に全く反映されないわけにはいかないであろう。また、社会の変化にもたらされた黄飛鴻映画の変化に直面する際、かれらはどのような態度を取ったのであろう。

本稿では、なるべく黄飛鴻映画に携わった人々の視角に近づきながら、かれらの自己認識に基づいて、こうした映画における黄飛鴻のイメージが創られてきた経緯を追い、その過程にはどのような社会的、歴史的背景があって、そして、これらの背景を基にどのような変化を経て「英雄」としての黄飛鴻ができたかについて検討してみたい。

## I 黄飛鴻と黄飛鴻映画

冒頭で触れたように、黄飛鴻は清末民初の人で、70余年の生涯を生きた広東の武術家である。広東で流行する拳法の代表的な流派に、洪家拳、仏家拳、莫家拳、蔡李仏拳、咏春拳などがあり、黄飛鴻は、その父の黄麒英とともに洪家拳の名手である。黄は12歳からその父に随って広州と仏山を回って武術を披露し薬を売り、その優れた腕で名を上げた。16歳（一説は22歳）の時に、銅鉄行（銅・鉄鋼製品製造業の業界組合）から武術の師匠として迎えたいという申し出があり、場所とあらゆる道具まで用意してもらい、黄は武館を開き、務本山房と称した。30歳前後で「宝芝林」という打撲専門の医院を開き、武術を教えながら医者として名を馳せた。その後、黒旗軍の指揮官である劉永福の怪我を治し、武術教頭として迎えられ、その一員として台湾へ赴き、日本軍との戦いにも参加したという。黒旗軍は敗れて台湾を去り、黄も広州に戻ったが、武術への情熱が冷めてしまって、武館を廃館し、医術に専念するようになった。民国になると、また劉に誘われ、広東民団の総教頭になった。1924年の広州商団事件で医院と家を焼かれ、1925年に亡くなった<sup>(13)</sup>。家庭の面では、24歳で結婚したが、3ヶ月後に妻が亡くなった。その後また二回同じ運命に遭った。最後に娶ったのは、のち

に香港で武館を開き、女流武術家として知られ、黄の弟子とともに映画にも出演した莫桂蘭である。息子は数人いるが、1919年に、武術に精通し、広東と広西を往来する舟の用心棒を務める次男が殺された理由で、黄は息子に武術を学ばせなくなった。それゆえに、かれに洪家拳のできる子孫がない<sup>(14)</sup>という。

しかし、非常に高い知名度と対照的に、黄飛鴻は2007年に広東省人民政府文史研究館と広東省地方志辦公室などによって共同開催された「広東歴史文化名人巡礼図片展」では、広東歴史文化名人に選ばれず、その代わりに彼の弟子である林世榮は入っているという、非常に興味深いニュースがあった<sup>(15)</sup>。

黄飛鴻が選ばなかった理由は、かれに関する史料のほとんどが伝説や小説などであり、事実と証明されたものが非常に少ないからであるという。このニュースを聞き、黄の故郷である西樵鎮の観光管理を務める西樵旅游辦公室的副主任は、「確かに意外である」と、落胆を隠さなかった<sup>(16)</sup>。なぜなら、1996年の春節ごろに、かの名高い黄飛鴻は西樵鎮出身であることがわかってから、有名人のゆかりの地としてこれを観光資源にすべく、西樵鎮政府が南海市（現在佛山市南海区）政治協商会議文史和学習委員会の協力を得て、西樵や広州、香港、広西、シンガポールなどを回って資料収集をし、1998年に『南海黄飛鴻伝』をまとめ、黄飛鴻の歴史の「本来の形を明らかにしよう」と努めてきたからである<sup>(17)</sup>。そして、黄飛鴻の醒獅と武術を地方のブランドにしようと、黄飛鴻獅芸武術館を開き、七回の「黄飛鴻杯」醒獅コンテストを開催した<sup>(18)</sup>。にもかかわらず、当初から『南海黄飛鴻伝』は、歴史の専門家に、「人物としては真実であるが、その経歴はでたらめなものである」と言われ、ついには名を広く知られながら信用できる史料が欠けているという理由で広東の歴史文化名人になり損なったのである<sup>(19)</sup>。

ことはそれで終わったわけではない。4ヶ月後の2007年10月には、黄飛鴻がついに広東歴史文化名人に仲間入りできた。その落選がニュースになったと同じく、今回の入選もまたニュースになり、全国紙によって報道された<sup>(20)</sup>。この記事の冒頭に、前述の「広東歴史文化名人巡礼図片展」は、「黄飛鴻の落選で広く注目された」とある。そして、専門家の努力によって、信憑性のある史料が見つかり、黄は台湾を侵攻する日本軍への抵抗に参加したことが確認され、歴史名人になる資格が認められたという。この信憑性があるとされる史料は、黄飛鴻が営んだ「宝芝林」という打撲専門の医院のピラである。そこに、1894～1895年の間に、劉永福から贈られたとされる「医芸精通」と書かれた額の<sup>(21)</sup>写真があった。先にも述べたが、確かに黄飛鴻が劉永福の怪我を治し、劉から額を贈られたようである<sup>(22)</sup>。その後、黄の医院は火事に遭い、額は焼かれたが、配ったピラは幸いに残ることができたという<sup>(23)</sup>。しかし、このピラだけでは、黄が劉の怪我を治したことを証明することはできても、劉の軍隊に加わり、日本軍との戦いに参加したことを確認する史料になるかどうか、検討する余地は大いにあると言えよう。黄飛鴻を歴史文化名人の列に送り込んだのは、この「信憑性のある」史料より、むしろ落選すると「広く注目された」という、かれの根強い人気であると思わざるを得ない。

そして、同じ記事にまた面白い内容がある。それまでに黄飛鴻の写真であると広く信じられてきた写真に写っているのは、実はかれではないことがわかったのである。黄の写真はあったが火事ですべて焼かれ、のちに香港のメディアはその未亡人の莫桂蘭にかれの写真を求めたさい、莫は黄本人の写真を見つけられず、代わりに顔がよく似ている十番目の息子の写真を渡した。メディアはこれが黄飛



写真1 本人ではないとわかったにもかかわらず、仏山黄飛鴻記念館で「黄飛鴻像」として展示されている写真。(2010年12月、筆者撮影)

鴻のものであると勘違いして報道し、それから誤解が広まったと<sup>(24)</sup>いう。

しかし、この事実がわかったにもかかわらず、仏山市にある仏山黄飛鴻記念館では、いまだにこの写真を展示しており、そこに黄飛鴻の写真であるとの説明が付いている。なぜ訂正しないのか、その理由ははっきりわからない。ただ、この写真が偽物だとすると、仏山の文化の象徴とされ、もっとも重要な古跡である祖廟の境内に建てられたこの二階建ての広い記念館には、黄飛鴻の遺物と言えるものは一つもなくなってしまふのは確かである。

伝奇的な経歴の持ち主として非常に有名でありながら、その生涯を語る確実な史料がなく、危うく広東歴史文化名人から外された。記念館まで建てられたが、その中に遺物と言える遺物はおかれていないのは、不思議と言わざるを得ないであろう。しかし、その答えは、この記念館を歩けばわかるはずである。二階

建てであるが、二階の面積は一階の約1/3しかない。だが、二階の展示は、「飛鴻影院」と題されるように、すべて黄飛鴻を主人公とした映画に関するものである。また、先に挙げた『南海黄飛鴻伝』の目次を見ると、そこに映画に関する内容が半分以上占めていることに気付くはずである。黄飛鴻を語るさい、映画はどれほど重要であるかがわかるであろう。

先に述べたが、黄飛鴻映画は1949年に一本目が誕生し、1996年までに100本の作品が作られた。いわゆる黄飛鴻映画とは、香港の映画研究家によれば、黄飛鴻を主人公とするあるいは黄飛鴻が登場する映画を意味し、ほかにも黄飛鴻本人の登場がないにもかかわらず、タイトルに「黄飛鴻」という人名をつける映画があるが、これらは黄飛鴻映画と認めないと定義されている。<sup>(25)</sup>黄飛鴻を演じた俳優は13人いる。中では、関徳興が一本目から黄飛鴻を演じ、77本の黄飛鴻映画の主演を務め、「生き返った黄飛鴻」と言われるほど、1960年代末までの約20年の間にほとんど黄飛鴻役を独占していた。ほかの12人は残り22本の映画でそれぞれ黄飛鴻を演じたが、中にはジャッキー・チェン（以下は、漢字表記の「成龍」を用いる）とジェット・リー（以下は、漢字表記の「李連傑」を用いる）などの大物が名を連ねる。とりわけ、李連傑が主演を務めた作品は非常に注目され、黄飛鴻を演じた役者の中で、関徳興に次ぎもっとも有名な一人になった。

一人の主人公を軸にシリーズを作るのは、映画史上には珍しいことではない。ハリウッド映画の007シリーズはその代表的な一つである。しかし、黄飛鴻映画はこのようなシリーズ映画とは違う。まずは一つの映画会社に属するものではない。資金や役者などの条件さえ揃えば、誰でも黄飛鴻映画を作れる。そして、実在した人物を扱っているにもかかわらず、映画の中にある黄飛鴻のイメージは一定したものではない。関徳興が演じたような中年の男だったり、李連傑が演じた30代の若い俠士だったりして、外見は違うが、威厳があって優しさがあふれ、周りに尊敬されて弟子に慕われる師匠としてのばあいがあふ。一方、成龍が演じたような、修業中の半人前の武芸者で、青臭さがあり、ずる賢さがあるイメージもある。さらに、香港の大物歌手の譚詠麟が演じたような、まったく武術のできない黄飛鴻もいる。また、黄飛鴻映画は持続的に作られてきたのではない。もっとも多かったのは

1950年代で、60余本が作られた。そして、60年代には13本で、70年代には7本、80年代に入ると低潮期になり、3本まで減少した。90年代にはまた復活し、15本の作品が作られ、そしてその影響は香港を超え、大陸まで広がり、黄飛鴻の名を中国全土に知れ渡るようにした。

シリーズとして、いかにも随意で規律がないように見える。しかし、実在した人物とはいえ、史料に記載されていないうえに遺物を一つも残さなかった黄飛鴻をスクリーンに生かしつづけ、さらに英雄にまで仕立てたのは、映画の本数が多いだけではできないのであろう。作る側の意図と、見る側の受け入れと、両方があったうえで、スクリーンに生きる英雄として黄飛鴻が初めて存在できると思わざるを得ない。

## II なぜ黄飛鴻なのか

清末民初の広東に有名な武術家は少なくなかったが、なぜ黄飛鴻だけが香港映画にそれほど好まれるのであろう。そして、なぜ黄は南海県の出身で、人生のほとんどを広州で送っていたにもかかわらず、最初に名を広げたのは香港であろうか。それは、偶然でもあり、必然の結果でもある。

黄飛鴻が香港から出発し、スクリーンを媒介として中国全土、さらに世界中の華僑社会で名を轟かした理由を探るのに、その弟子の林世栄から始めなければならない。

先にあげた黄飛鴻が広東歴史文化名人に選ばれなかったニュースに、その弟子の林世栄が入選したことも報道されている。林はもともと広州で露店を出して肉屋を営み、「猪肉荣」というあだ名を持ち、広州で黄飛鴻に師事していたが、後に香港で武館を開き、多くの弟子を育てた。優れた腕の持ち主で、清末に行われた広東武術大会で第一位の成績を収めたことや、チャリティイベントで武芸を披露し、当時の臨時大統領であった孫文の賞賛を得て銀のメダルを授与されたことなど、多くの並み外れた経歴を有する。そして、1930年に自ら実演して弟子に写真や絵などで記録させ、文字の解説をつけて三種の拳法をまとめて、本を出版した。この行動で、流派や門閥の束縛を打破し、それまで師匠から弟子に直接技を見せて真似させるという武術の伝授法を革新したと、高く評価されている。<sup>(26)</sup>

林世栄と対照的に、師匠の黄飛鴻には、前述のとおりオーソドックスな歴史学に認められるような、生涯を記した確実な史料がほとんどない。かれを知るには、いわゆる、「正史に見られなく、官辺の歴史に取り上げられないため、個人的に書いた伝記小説や巷で語られる懐古的な伝説に頼るしかない」<sup>(27)</sup>のである。これらの伝記小説や伝説を残し、黄の名を広げたのは、林世栄の弟子であった。そして、黄飛鴻映画の土台を作り、さらに黄飛鴻映画から出発して香港のカンフー映画の発展に大きな役割を果たし、黄飛鴻の威名を持続させ、そして間接的に高めたのも、林世栄の弟子と又弟子たちであった。

黄飛鴻の名が天下を広ったことについて、次のような議論がある。



写真2 仏山黄飛鴻記念館に展示される林世栄とその弟子が作った拳法書の一つ。(2010年12月、筆者撮影)

人には生きていた間に運がいいのもいるし、なくなった後に幸運に恵まれるのもいる。黄飛鴻は後者である。……清末民初に、広州には有名な武術家は多かった。より前の世代に鉄橋三や王隠林などがいるし、その後には黄満栄や呂龍山などがいる。しかし、なくなっても高名の失墜することがないのは、黄飛鴻だけである。異例と言ってよかろう。あらゆることにそのわけがある。黄が死後の数十年間、幸運でありつづけられたことにも、原因がないわけではない。まずは後継者がおり、その弟子や又弟子に、文学ができる人も武術に優れた人もおり、黄の事跡を敷衍して誇張し、さらに映画界の関心を惹き、黄のために多くの話を作って映画にし、巷間のうわさ<sup>(28)</sup>になって知らない人がいないようにした。

ここでいう黄飛鴻の「後継者」とは、林世栄の弟子で、黄飛鴻の又弟子である朱愚斎や劉湛、及び劉湛の息子で、香港映画においてもっとも重要な殺陣師である劉家良などを意味するに違いない。なかでも朱愚斎は、文学ができて黄飛鴻の伝記小説を書き、黄飛鴻映画ができるきっかけを作った人である。

朱愚斎は広州に生まれたが、のちに香港に移住し、そこで武館を開いて間もない林世栄と出会い林の弟子になった。黄飛鴻が香港を訪れたさい、黄の前で武芸を披露する機会を得て、黄から直々の指導を受けたことがあるという。1930年代に、朱は林世栄の助手として三種の拳法書の出版に携わ<sup>(29)</sup>った。黄飛鴻がなくなってから約十年後、朱が香港の『工商晩報』に、「黄飛鴻別伝」のシリーズを連載し始め、大きな反響を呼んだ<sup>(30)</sup>。この小説の内容は、ほとんど朱が林世栄から聞いた話に基づいたものであるという。内容については、「すべて実記であり」、「その経歴に依拠する」と、作者が断わっているが、架空のところも少なくない。その後、朱はまた黄飛鴻のほかの弟子から聞いた話を書き加えて、「黄飛鴻行脚真録」を連載し、黄飛鴻についてのさまざまな逸話を多く書き下ろし、のちに『黄飛鴻江湖別記』にまとめて本にした。文学的に見れば、朱の作品のレベルは高いと言えないと批判する研究者がいる。連載であるがゆえに、同じパタンの話の繰り返しが多く、文章もストーリーもかなり粗末<sup>(31)</sup>である。だが、朱の小説に、黄飛鴻が住む広州の日常生活や慣習、そしてペテン師の術をはじめ、武術界の掙や整骨の技など、武術で生きる人の世界におけるさまざまなディテールも多く見られる点で、多くの研究者に評価されている。この特色は、早期の黄飛鴻映画にも明らかに反映されている。

黄飛鴻について小説を書いたのは、朱愚斎が最初でもなく最後でもないが、朱の作品はもっとも大きな影響を及ぼしている。朱愚斎が描いた黄飛鴻がいなければ、黄飛鴻映画の誕生さえなかった可能性はかなり高いのである。黄飛鴻映画の生みの親で、1949年の一本目から、計59本の黄飛鴻映画の監督を務めた胡鵬によれば、黄飛鴻の存在に気付いたのは、友人とともにフェリーでカオルンから香港島へ向かう途中、『工商日報』（「黄飛鴻伝」を連載したのは『工商晩報』であり、胡鵬の記憶に誤りがあると思われるが、ここではその回想録をそのまま引用する。）に連載する「黄飛鴻伝」を読み、そしてその友人はたまたま朱愚斎の知り合いであることがわかったからである<sup>(33)</sup>。まさに偶然であろう。

黄飛鴻のことを知ったのは偶然であるが、映画にし、そして成功させたことは偶然だけではない。もっとも、映画は一つの産業であり、資金が必要であるうえ、利益の見込みがなければ作ったりはし

ないはずである。すなわち、当時の胡鵬は、黄飛鴻を主人公にし、ある種の映画を作れば市場に受け入れられるはずだと考えていたのである。

まずは、香港にはカンフー映画の歴史があり、多くのカンフー映画ファンがいる。<sup>(34)</sup> 最初の広東語カンフー映画は1938年に誕生し、それから1940年代末までの間に、計36本が作られた。この時期を、香港映画の研究者は広東語カンフー映画の成長期という。この時期の作品では、武術シーンの動きは基本的に中国の舞台演劇から脱胎したもので、それほどリアルではないうえ、かなり粗末である。もっとも多く見られる動きは、まず刀を横に振って相手の頭を切ろうとし、相手が体を屈めてこれを避けると、また相手の脚に刀を向け、切ろうとして横に振り、相手は跳びあがってこれを避け、<sup>(35)</sup> さらに何回も繰り返すという、非常に簡単なものである。1940年代末になると、このようなカンフー映画は観客に厭われるようになり、胡鵬によれば、「多くの観客、とりわけ武術を好む観客は、このようなカンフー映画に迫力を感じないだけでなく、あまりにもリアルさに欠け、ほとんど娯楽的価値がないとさえ思い」、<sup>(36)</sup> 「カンフー映画はすでに吊鐘を打ち鳴らされている」ほど、非常に困難な状況に陥っており、新しい突破口が求められていた。

さらに、もう一つの条件も備わっている。資金である。中国での発声映画の国産化は1930年代中期からである。これを機に、広東語映画が上海と香港で多く作られるようになったが、国語の普及に乗り出す国民政府はこれを好ましく思わず、1936年に方言映画の製作と上映の禁止令を出した。<sup>(37)</sup> 間もなく日中戦争が勃発し、この政策は実行されなかったが、戦争が終わると再び強調されるようになった。香港はイギリスの植民地であるため、この禁止令に従う必要はないが、広州を中心に広東語区での上映が大半の興行成績を占める香港産の広東語映画は、大陸の市場を失ってしまい、一時期ほとんど停滞してしまった。また偶然でもあるが、1947年に、広東語映画の『郎帰晚』が東南アジアで大きな収益を得、香港の映画業界の目を東南アジアに向けさせ、新しい市場を見つけた広東語映画は活気を取り戻した。<sup>(38)</sup> なかでも、カンフー映画が特に好まれていた。香港の広東語映画が東南アジアの市場で好調になり、映画産業に参入するシンガポールとマレーシアの華僑企業家が急激に増加し、脚本とキャスターだけを見て前払いし、その映画の東南アジアでの上映権を獲得するという取引方法も盛んに行われ、さらに香港映画の製作に直接資金を投入することも多くなった。<sup>(39)</sup>

こうした中、黄飛鴻映画は時運に応じて誕生したと言えよう。黄飛鴻の伝奇を偶然に目にしたこと<sup>(40)</sup> で、広東語カンフー映画の衰退に直面する胡鵬に、一つの案が「閃いた」。黄飛鴻を主人公に映画を作ることだと。その具体的な構想について、かれは次のように述べている。

中国固有の尚武の精神を提唱することができるだけでなく、広東の武術界における大切な史料を宣伝することもでき、まさに一石二鳥であり、作らない理由はなかりう。しかし、以前のよ  
うな舞台的動きを棄て、しっかりした中国の国術の技に着眼し、本格的でなければならない。そ  
して、映画技術を駆使し、各流派の優れた武術を発揚すれば、観客に斬新な体験をもたらすこと  
ができる。私は深く信じる。<sup>(41)</sup>

こうして、東南アジアの映画経営者である温伯陵の投資で、一本目の黄飛鴻映画が作られ、市場で  
大きな成功をおさめ、前払いして次の黄飛鴻映画を求めるオファーが殺到した。早期の黄飛鴻映画で<sup>(42)</sup>

悪役を担当し、「奸人堅」というあだ名をもらった石堅は、黄飛鴻映画は映画会社の「救命の靈薬」だと振り返った。資金繰りに苦しむと、黄飛鴻映画を作れば、東南アジアの経営者に前払いで買ってもらうことができるからである。<sup>(43)</sup>

また、黄飛鴻映画の誕生は多くの象徴的意義を持つと指摘される。大陸市場を失った香港映画は、そのすべてを香港と東南アジア市場に頼るようになった。香港市場はいうまでもないが、主に広東出身の華僑の需要に合わせるように、映画の題材や文化的趣味も香港的で広東的になったという。<sup>(44)</sup> 黄飛鴻映画は香港で誕生したが、ストーリーのメイン舞台は黄本人がその生涯のほとんどを送った広州であり、そしてこの状況は1990年代まで変わりがなかった。さらに、関徳興が主演を務める早期の黄飛鴻映画に、広東の代表的な民間芸能が多く見られ、中でも広東醒獅の登場ないし広東醒獅をストーリーの要にする例が非常に多い。これはのちに黄飛鴻映画のもっとも重要な特徴になり、また多くの意味を持たされるようになった。

こうして、胡鵬の考えた「ある種」の映画を作る条件が揃ったからには、黄飛鴻映画の誕生は必然とも言えよう。ただし、この種の映画の主人公に黄飛鴻を選んだのは完全に偶然であろうか。黄飛鴻と同時に、方世玉や洪熙官などの広東の武術家を主人公とした小説も流行していた。<sup>(45)</sup> 必ずしも黄飛鴻しか選択肢がないとは言えないようである。果してそうであろうか。または、ほかの優れた武術家を主人公にしても同じ効果が取られるか。その答えは、また朱愚齋に求めないわけにはいかない。

朱愚齋は黄飛鴻の小説を書くことで多くの人に知られるが、プロの小説家ではない。胡鵬が黄飛鴻を主人公に映画を考案し、朱愚齋を訪ねようとしたときに友人からももらった朱の連絡方法は、「安和堂薬局」という薬屋であった。<sup>(46)</sup> 黄飛鴻には宝芝林があり、広東十虎の一人の蘇乞児も黄飛鴻と並んで打撲専門の名医と知られ、そして、仏山で咏春拳法の源流を作った梁贊も、打撲の処方と措置法のノートを残したなどの事実に注目したい。<sup>(47)</sup> 明らかに、朱は小説を書くが、多くの武術に携わる人と同じように、打撲専門であったかはわからないが、漢方医である。つまり、朱愚齋は少なくともこの時にはまた武術界に身をおいているのである。<sup>(48)</sup>

いわゆる武術界とは、俠客小説に描かれたような伝説に満ち、神秘的で超越的な俠士たちの世界ではない。とても世俗的で、常に現実と向き合わなければならない世界なのである。そもそも、黄飛鴻たちが生涯を送った広州と仏山、さらにかれらの弟子が活躍する香港に多く存在する武館は、武術を習うところだけではない。その背後には、清代以来、広東で発達してきた商工業が生み出した不安定層の組織である西家行がある。<sup>(49)</sup> そして、武館が、このような不安定層によって結成された相互扶助ネットワークの役割を果たしている。

明末清初にあたる17世紀半ばから18世紀末までに、中国の人口は爆発的に増えた。中でも広東省と福建省では人口の増加が激しく、耕地の不足が甚だしく、米価をはじめ生活コストが急激に上昇した。そして、「攤丁入畝」<sup>(50)</sup> 制度によって土地との束縛を解かれた多くの農民が、故郷を離れることを選び、また未開墾地の多い四川や米価の安い江西などへ移住するか、雇用の機会が見込まれる町に出て職を探し、さらに何らかの技術を身につけようとした。こうして、中国史上で珍しく太平の世でありながら大規模の自主的な人口移動が発生し、生産力の大規模な移転をもたらした。このような情勢の中で、広東の二大都市である商工業の発達した仏山と広州では多くの労働力が求められ、周辺地域の土地を失った農民を引き寄せた。しかし、彼らを待っていたのは決して安定した生活ではなかつ

た。雇用の保証や賃金の交渉、さらに死後という人生の大問題に直面しなければならないのである。こうして基本的に農業社会であった当時の中国で、土地から離れ、資本を持たず雇われることによって生計を立てるが、雇い主と長期雇用関係を結んでおらず、生活も社会関係もかなり不安定なものたちが、宗族などの血縁関係、または村落などの自然発生の地縁関係による社会組織の保護や扶持を受けることができず、非血縁的で労働組合のような組織を結成するかまたは参加して、その保護を求めるのがごく自然である。

こうした組織と強く結び付いているのが武館である。黄飛鴻が最初に武館を開いたのは銅鉄行の要請があったからであることは、その一例である。それゆえに、これらの武館に入って武術界に身をおき、同じ流れを汲んだ人の中には、かなり強い結束がある。彼らは師弟や兄弟弟子のつながりで、自分の居住地域を超えた大きいネットワークを作っている<sup>(51)</sup>。あるいは、こうしたネットワークは、かれらにとって家のような存在であると言ってもよかろう。黄飛鴻のばあい、本人が亡くなった後にもこうした家のような結束が強く保たれている。黄飛鴻が人生の終わりを迎える際、経済的に非常に困窮しており、亡くなった後に葬儀を挙げるのはもちろん、墓地を買うことさえできなかったが、弟子が金を出して師匠に永眠の地を買ってあげた<sup>(52)</sup>。そして、夫を亡くして頼りがなくなった未亡人の莫桂蘭は、林世栄などの弟子の計らいで二人の息子を連れて香港に移住し、そこで武術倶楽部や薬局を営んで生計を維持し、さらに黄飛鴻映画の撮影にも携わった<sup>(53)</sup>。家族のように助け合う強い結束があるため、黄飛鴻の又弟子であり、武術界に身をおく朱愚斎にとっては、プロの作家のように作品を作りたいために誰かを主人公に選んで書いたのではなく、むしろ師匠の林世栄から多くの逸話を聞かされ、そして一度だけであるか直々の指導を受けたことがあり、憧れの存在であり、誇りに思う黄飛鴻を顕彰したいがゆえに、筆を執ったのであろう。

こうした「家」は、多くの黄飛鴻映画の表と裏の両方に強い存在感を示しており、そしてこの家の家長であり、弟子に慕われる黄飛鴻は、まさに武術家の理想像のように映されている。

### III 武術家の理想像

最初にスクリーンに現れた黄飛鴻は、まず胡鵬の考案した通り「真功夫」という本格的な武術を見せた。一本目の『黄飛鴻伝』の宣伝パンフレットでもこれを強調した(資料1)。胡鵬はその回想録に、「広東の真功夫は初めて南国のスクリーンに上がった」という見出しをつけて一節を設け、これについて記した。その記述によると、朱愚斎の人脈で黄飛鴻の多くの弟子や又弟子が第一作から殺陣シーンの撮影に参加した。これによって、当時の多くの映画と違って、端役を演じるのはスタントマンではなく実際に武館で武術を習っている弟子である。そして、同じく黄飛鴻の又弟子の梁永亨を武術アドバイザーとして招き、役者の動きをなるべく本物の武術に近づかせた。さらに、ストーリーの途中に南方武術の紹介と実演を入れた。一作目で紹介されたのは黄飛鴻が得意とした虎鶴双形拳と五郎八卦棍の二種である<sup>(55)</sup>。

関徳興を主役にした一つの重要な原因も、「真功夫」を見せたいためである。関徳興はもともと広東オペラの俳優で、立ち回りをやる小武であり、舞台上積んだ豊富な経験で型を決めるのに長けているほか、黄飛鴻と流派は違うが武術がある程度できた。関には最初の広東語の発声映画に主演した



資料1 一本目の黄飛鴻映画である『黄飛鴻伝』のパンフレット。左下に本格的武術を見せることを強調した宣伝文句がある。(方保羅『図説香港電影史』, 三聯書店(香港)有限公司, 1997:163)

<sup>(58)</sup> 想録で述べているが、ほかにもう一つ述べていない理由がある。それは、関徳興は40代で、中年の人だからである。資料1の宣伝パンフレットをやや注意を払って見てみよう。役者の中で名前がもっとも目立つのは、主演俳優の関徳興ではなく、黄飛鴻の愛弟子の梁寛を演じる曹達華である。当時、カンフー映画の大スターとして、「銀壇鉄漢」と呼ばれる曹達華の人気は非常に高く、東南アジアなどの海外市場でも興行成績を保証する人物と目されたのである。かれをキャスティングした理由の一つも、<sup>(59)</sup> 客足のためである。それにしても、黄飛鴻役の俳優を検討するにあたってはかれを視野に入れなかった。その理由は、最初から師匠としての黄飛鴻を描くつもりで、中年で貫録のある俳優が求められ、曹達華は若すぎるからであるに違いない。

こうして、武術もでき、東南アジアでの知名度もあり、人柄の評判も良い中年の俳優を主役に決め、師匠であり英雄である黄飛鴻をスクリーンで生き返らせる序幕が開いた。1949年10月8日に一本目の『黄飛鴻伝・上』が上映され、その四日後の12日に『下』も上映された。それから毎年2、3本のペースで作られ、1955年に5本まで増えたが、1956年にはピークに達し、25本まで上った。その後は本数が減ったが、1950年代には黄飛鴻映画の上映がない年はなかった。1960年代の初期に、<sup>(60)</sup> 東南アジアの民族運動の勃興で「前払いブーム」が消え、香港映画は歴史的な低潮に入り、黄飛鴻映画もその影響を受けて衰退した。1961年に上映したのはわずか一本で、その後の5年間に黄飛鴻映画はいったん姿を消したが、1968年にまた復活し、1970年までは毎年作られた。1970年までに計76本の黄飛鴻映画が上映されたことになる。1953年に作られた白玉堂主演の2本を除けば、黄飛鴻役を演じたのはすべて関徳興であり、<sup>(61)</sup> そのほとんどの監督は胡鵬であった。

この数字の変化を左右したのは、やはり市場であろう。黄飛鴻映画を映画会社の「救命の霊薬」とたとえた石堅は、その一作目は「良い興行成績を収めたから、かれ(監督の胡鵬)が黄飛鴻映画を作

経験があり、その後にも何本かの主演作品があったが、当時には主に東南アジアやアメリカの華僑社会でその本業である広東オペラの公演をしており、広東オペラの領域では高名であるが、映画スターとしてはそれほど有名ではなかった。関徳興のほか、演技力を高く評価され観客を呼ぶ保証のある呉楚帆も視野に入っていたが、武術が全くできない理由で外された。当時の映画技術では、<sup>(57)</sup> 吹き替えでの撮影はできなかったからである。

言うまでもないが、関徳興が選ばれた理由は武術ができるだけではない。かれは広東オペラの俳優として海外で広く知られていることも一つの理由である。なにしろ、東南アジアの市場を考えなければならないのである。そして、関は日中戦争中ほかの広東オペラの名優とともにチャリティー公演を行い、その興行収入で戦闘機を一機買って寄付したことで「愛国芸人」と言われ、芸だけではなく人としても敬慕されるイメージを持ち、黄飛鴻を演じるのにふさわしいと思われたのである。これらの理由は胡鵬がその回

れば、海外からのオファーが来る。……タイトルを考案し海外のディーラーと話すだけで、買い手がつくのだ……台本さえできていないのに撮影を始める時もあった<sup>(62)</sup>と振り返っている。市場の需要が大きければ大きいほど、多くの作品が作られるのは当然である。胡鵬によれば、ピークの時には違う投資者が同じスタジオにそれぞれセットを立て、胡鵬がそのクールを率い厳しい時間割でスタジオを駆け回り、何本もの黄飛鴻映画の撮影を同時に進行させていたという<sup>(63)</sup>。

いかにも粗末な映画しか作れない体制のようであるが、この時期の黄飛鴻映画はビジネス的に成功しただけではなく、関徳興による黄飛鴻役は当時から非常に高い評価を受けてきた。関本人も、この仕事を非常に大事にしており、真剣に取り組んだという。役作りについて、関は次のように述べている。

黄飛鴻は重みのある人で、言葉も行動もそうである。言行一致で、志に背くことはない。……昔の国父孫文の講演を見ればわかる。それはすごかった。かれの語調は穏やかだが、眼差しは人の心を惹くことができる。……黄飛鴻の言ったことに決して虚言がない。かれはそういう性格なのである。私はこの仕事を簡単に済ましたわけではない。黄飛鴻映画の撮影に臨むと、必ず正装して芝居の神様を拝み、天地を拝む。天と地の許しを得、黄先生の加護を得、私は必ず良い芝居ができるようにと。そして、私は自分の良心に従い、多額の報酬を取ることはしない。私は90余本の黄飛鴻映画の撮影に携わったが、一本の報酬はわずか4000元<sup>(64)</sup>しかない<sup>(65)</sup>のである。

関徳興は1906年に生まれ、13歳で修業を始めてから映画界に入るまでの間に、広東オペラの世界におり、また武術はある程度できるが黄飛鴻と流派が違い、両者の間に何らかの接点があったとは思えない。かれの持つ黄飛鴻に対する印象は、すべて朱愚齋の小説か黄の弟子の話に基づくものであったに違いない。また、ここで述べているのは、彼自身が考えた黄飛鴻のあるべき姿であったかもしれない。

関徳興が演じる黄飛鴻は、カンフーマスターと言うまでもなく非常に強いイメージを持ち、戦うと必ず相手を破る。しかし、カンフー映画なので激しい殺陣シーンは多いが、映画の中の黄飛鴻は好戦的なわけではなく、却ってかなり恭謙で平和を好んでいるように見える。これについて、香港のベテラン映画研究家の余慕雲は、次のように指摘している。

一貫して中国の伝統的美徳、とりわけ儒教の美徳を顕揚している。たとえば礼（恭謙で礼儀正しい）、義（義侠である）、忍（克己して忍耐深い）、恕（悪人に改めることを勧める）、仁愛（年寄りと貧しい人を助ける）、平和（問題を話し合いで解決すると主張する）などである。

黄飛鴻映画は武徳を特に強調している。すなわち、武術を習うのは健康のためであり、腕を頼みに人を苛めたり喧嘩を起こしたりすることを固く戒め、個人の得失や榮辱は気にしなくもいいが、悪人を懲らしめて人を助けるためなら必ず立ち向かう。しかし、力に任せることには反対し、やむを得ないばあいではなければ争って人を怪我させることはしないほか、悪人に対してもできるだけ殺傷せず、心を改めるように諭す<sup>(66)</sup>。



資料2 1968年の『黄飛鴻威震五羊城』で、黄飛鴻が相手に頭から茶をかけられても怒らないシーンがあり、その忍耐強さと寛大さを表している。（『電影口述歴史展覧之『再現江湖』』、香港電影資料館、1999：38）

香港映画資料館が黄飛鴻映画のために行った特別企画のタイトルが「仁者無敵」であるように、映画の中の黄飛鴻は、まさに仁恕の心を持つ儒俠である。中でも、忍すなわち忍耐強く、自分のメンツよりできるだけ争いを避けることを第一に考えることは、多くの黄飛鴻映画で繰り返して強調されている。悪役からいかなる挑発ないし侮辱を受けても、乗ったり仕返ししたりはしないが、弱い人を助けるか悪人を懲らしめるためには、悪を働いた相手と激しく戦いこ

れを打ちのめすというパターンは、一時期を除くほとんどの黄飛鴻映画に見られる。余慕雲によれば、このパターンは、1950、60年代の関徳興主演の黄飛鴻映画によって作られたのである。<sup>(67)</sup>

これはまさに武術家の理想像と言わざるを得ない。前述のとおり、武館は武術を習う道場だけではなく、都市で働く労働者の広域的相互扶助ネットワークの役割をも果たしている。それゆえに、武術を身につけ仲間との結束でより強い力を持ち、自らを守ったり利益を勝ち取ったりすることはもちろん重要であるが、できるだけ紛争を抑えることも重要であろう。黄飛鴻を代表として、こうした農村社会からはみ出て武館を開き、弟子を抱える人は、かれらの世界における秩序を維持し紛争を抑える役割が期待される。規模はまちまちであるが、一つの武装集団にもなりうる多くの弟子を統率しており、その態度は弟子の行動を左右するのである。ほとんどの作品に、黄飛鴻が実力を見せびらかしたり、挑発されて仕返しに駆けようとしたりする弟子を叱る場面が見られる。また、悪人を懲らしめてから、必ず衆人に向かって、互いに仲良く助け合うべきで、平穩の世の中こそ良い生活の保証であると説くのも、理想的な武術家としての黄飛鴻がその役割を果たしているのである。

実際のところ、黄飛鴻本人もかなり温和であるという。莫桂蘭によると、黄はいつも微笑んでおり、近所との関係が良く、弟子にも平等に接し、よく冗談をいう。そして、高名ではあるが、「豆腐教頭」と自称し、自らのことを「弱い」と謙遜し、争いを嫌ったという。<sup>(68)</sup>しかし、かれは侮辱を受けても争わないという例は、莫桂蘭の話にも、朱愚齋の書いた小説にもほとんど見当たらない。確かにかれは弟子の梁寛やほかの武術家ほど短気ではなく、情勢を見極めてから行動するが、挑戦を受けると譲ることがなく必ず挑戦者を打ち負かす人である。黄飛鴻のような武館を開く人にとって、常に技比べから道場荒らしまでさまざまな挑戦に直面しなければならない。むしろ朱の小説では、こうして絶えず力で挑戦者を伏すことこそ、かれの気概を示すものであると言えよう。また、最初の黄飛鴻映画の中でも、かれのイメージはそれほど恭謙で忍耐強くはなかった。舞台となる宝芝林医院に、ある外開きの扉が特別に設けられているのは、黄が道場荒らしに来た人を一発で蹴り飛ばして追い出すためである。

明らかに、関徳興の演じる黄飛鴻のイメージは、初めから「忍」を強調する儒俠ではなかった。これは武術界が求める武術家の理想像を、映画で再現するうちに加工を積み重ねた結果である。その理由は、監督の胡鵬をはじめ、映画の製作に携わる人の価値観を表しているからであろう。胡鵬が、ある陋習と思われる行事を正そうと自らの考えを映画に織り込み、「教育的意義のある」作品を作り、

映画の中で黄飛鴻の手でこれを実現したことがある。<sup>(69)</sup> また、関徳興本人の思い入れも重要な原因であろう。かれの息子が言ったように、「かれが黄飛鴻と言う役に入り込んだと言ってもいいし、黄飛鴻がかれ自身に入り込んだと言ってもいい」<sup>(70)</sup>のである。関徳興は非常に貧しい童年を送った。住む家がなく、母と祠堂に寄居する時もあった。人の牛の世話をして自らの生活費を稼いでいたが、死んでも失踪しても気にしてくれる人がおらず、むしろ牛をなくす方が大変で、牛の値段は子供の倍以上なのだ<sup>(71)</sup>と自ら語っている。こうした童年時代を強いられ、13歳で広東オペラの修業を始めて、名優になって己の運命を変えた関徳興は、黄飛鴻らの生きる世界に実感を持ってないのは、容易に推測できるであろう。黄飛鴻映画の撮影に加わった黄飛鴻の直系の弟子も、関は俳優であり武術家ではないと認識している<sup>(72)</sup>のである。関徳興が黄飛鴻役を演じ続けた理由について、「かれの人格を崇拜しているからだ。黄飛鴻映画のいいところはその面白さにあるほか、人に悪い影響を与えないことにもある。脱ぐことも猥褻なことも悪態をつくこともないからである。人を怪我させると治してやるし、かれに害を加えようとする人でも、生かしてやるから、人々に敬慕されるのだ」と述べたことがある<sup>(73)</sup>。かれは武術に携わる人としてではなく、俳優として、または普通の人間として、自らの理解と願望で黄飛鴻を理想化し、映画で表現したと言ってもよからう。

そして、一つ注目したいことがある。この時期に作られた関徳興主演のほとんどの黄飛鴻映画には、ほぼ不動の脇役が何人かいる。胡鵬の回想録に、主要人物についてこのような紹介がある(資料3)。悪役の石堅は例外なく黄飛鴻に対立する立場であるが、ほかの三人は黄の弟子である。なかでも黄飛鴻に次ぎもっとも重要な役は、先に挙げた曹達華が演じる梁寛である。

黄飛鴻には多くの弟子がおり、もっとも意に合ったのは梁寛であった。梁寛は故郷の梅県から出稼ぎで広州に出て、鍛冶屋の見習工であったが、武術が好きで、毎晩仕事が終わると必ず黄飛鴻の武館の前に座り、黄が近所に武術界のエピソードを話すのを熱心に聞き、ついに黄の弟子になった。梁寛が入門した後も鍛冶屋の仕事を続けていたが、武術が上達して師匠に近い能力を身につけ、黄に命じられてから仕事を辞め、武館の助教になった。やがて、梁寛の知名度も上がり、果欄・菜欄・鮮魚欄、すなわち青果・野菜・鮮魚の卸業者組合の三欄行に迎えられて、「三欄教頭」<sup>(74)</sup>(三欄行の武術教授)となった。しかし、才能があつて努力も惜しまず、優れた腕を持ち、黄の後継者と目されたにもかかわらず、梁寛はかなり短気で挑発に乗りやすく、喧嘩することが多かった。ついに人と争った末に若くして命を落とした。<sup>(75)</sup>

師匠の黄飛鴻と同じように、梁寛にも写真や遺物がない。そして、本人が戦いで殺されたと同じように、



資料3 タイトル:『黄飛鴻』シリーズにおける五人の主要人物; キャプション: 右上:「師匠黄飛鴻 関徳興」; 左上:「生き返った梁寛 曹達華」; 中央:「本物の猪肉菜 劉湛」; 右下:「著名奸人 石堅」; 左下:「ホラ吹き男牙 刷牙 西瓜」。(胡鵬『我與黄飛鴻』, 作者個人出版, 1995: 扉)

1950年に作られた第四作目は『梁寛帰天』というタイトルが付けられ、この作品の中で梁寛が死んだ。これで梁寛の登場はしばらくなくなったが、1955年の12作目にまた姿を見せた。それから1960年代初期までの黄飛鴻映画の最盛期には、曹達華はほぼ関徳興と等しく名前がキャストリストに見られないとおかしいほど常連である。曹の人気の高いからである可能性がなくはないが、梁寛を復活させた理由を教えてくれる資料がない。しかし、梁寛の役は黄飛鴻映画における重要さがわかる。映画の中だけではなく、朱愚斎の小説にも、自らの師匠である林世栄の出番は非常に少ないが、会ったことすらない梁寛が黄飛鴻に次ぎもっとも多く登場している。

また、猪肉榮と言うあだ名を持つ林世栄は前述のとおり黄飛鴻映画のきっかけと土台を作った朱愚斎の師匠で、黄飛鴻の弟子の中でもっとも大きい影響を残した人である。林世栄を演じるのは、プロの俳優ではなく林世栄の弟子で、武館を持つ武術家の劉湛である。劉湛の経歴は梁寛に似たところがある。劉はもともと貴金属工場の見習いで、武術に興味を持ち、しばしば林世栄の武館に訪れて門外から眺め、ついに林世栄に気付かれ、門人となった<sup>(76)</sup>。しかし、劉湛と梁寛との間には決定的な違いがある。劉は世渡りが上手で、広い人脈を持ち、広州と香港で十数軒の武館を開いた。劉湛の演じた林世栄は、口数が少なく実直で優しいが、やや優柔不断な人である。目立たないが、短気で騒がしい梁寛と対照的に、雰囲気落ち着かせる存在である。

牙刷蘇は架空の役である。弟子というより雑務係のようで、武術を身に付けておらず、自分に関係のないことに頭をよく突っ込む。法螺を吹くことが多く、そのせいで失敗をしでかしたりすることもしばしばある。弟子仲間にはいつも笑われるが、何かがあると必ず助けてもらえる。映画の中ではコメディアン的存在である。

ほかにはまた何人かの弟子の役がいる。こうしたほぼ不動の登場人物及び配役は、黄飛鴻を中心に一つの「家」を作ったと、香港の映画研究家が指摘した。この家では、黄飛鴻は厳しい師匠でありながら優しい父として家長を務める。かれの弟子はすべて草の根の階層に属し、それぞれ弱点がある。かれらによって作った家では、内部に揉め事があると、家長の黄飛鴻がこれを調停し、外部からの挑戦や脅威があると、家長の黄飛鴻が家の代表としてこれを片付ける。そして、黄飛鴻の争いの解決法は、前述のとおり、忍耐強く、仁恕を第一にするものである。これはまさに父を中心に、仁愛を基本とする典型的な儒教の倫理観念であると主張している<sup>(78)</sup>。

しかし、先に述べたように、この「家」は、儒教の倫理観念による産物より、黄飛鴻ら武術界に身をおき同じ流れを汲んだ人によって作られた、家のような相互扶助ネットワークを反映していると理解した方がよかろう。短い生涯を送った梁寛は、並はずれた業績を持ち多くの弟子を育てた林世栄より、黄飛鴻映画に重要な位置を占めるのも、これを示していると思われる。なぜなら、梁寛は師匠であり、家長である黄飛鴻のもっとも気に入りの弟子であり、ほかの弟子仲間に慕われ、存命していれば黄飛鴻の衣鉢を継ぐはずであり、いわば一家の長男のような存在であるからである。映画の中でも、師匠がいなければ、梁寛がほかの弟子を束ね、かなりの統率力を見せている。

また、映画の中の家だけではなく、初期の黄飛鴻映画を支えたのは、その弟子や又弟子たちが作った家のようなネットワークである。劉湛が自らの師匠で主要人物の林世栄を演じるのはその一例である。朱愚斎の人脈で、一本目の作品に7人の黄飛鴻の又弟子が撮影に参加したと、胡鵬はその回想録に記したが、これは朱愚斎の個人の人脈より、黄の門人のつながりであろう。また、ストーリーの途

中で南方武術を紹介したが、その実演を務めたのも黄飛鴻の弟子である。さらに、弟子だけではなく、莫桂蘭及び黄の十番目の息子で、武術のできない黄漢熙も、顧問として撮影にかかわった。さらに三作目で、莫桂蘭が未亡人として、黄飛鴻から教わったという子母刀を実演した<sup>(79)</sup>。歴史人物に関する映画の撮影で、製作側の要請に応じてその子孫などがアドバイスする例は少なくないが、家族や弟子がこれほど深くかかわりさらに支えになる例は、黄飛鴻映画にしか見られないと言えよう。さらに、黄飛鴻映画の殺陣シーンで端役を務めるのも、黄飛鴻の流れを汲んだ武館のメンバーである。劉湛の息子の劉家良もその一人で、黄飛鴻映画から出発し2010年の香港アカデミー賞で生涯功労賞を贈られたほど、香港映画の発展に大きな役割を果たした。



資料4 三作目の関係者集合写真。一列目の中央に座るのは監督の胡鵬で、その後ろには関徳興であり、さらに関の後ろに立つのは莫桂蘭で、その後ろにいる背の高い男は黄漢熙である。(鍾宝賢『香港百年光影』、北京大学出版社、2007：126)

#### IV 市井の英雄から民族の英雄へ

1949年に誕生した黄飛鴻映画は、1950年代にブームになり、1960年代初期にいったん姿を消し、中期からまた一時的に活気を取り戻したが、全体的に下り坂を辿ることに変わりがなかった。

1960年代初期における黄飛鴻映画の減少に、先に述べたように東南アジア市場の縮小が一つの原因である。そして、当時の黄飛鴻映画は、1950年代と同じように関徳興への依存度は非常に高かった。関が一時的に香港を離れたために、1962年からの5年間は、黄飛鴻映画の撮影は完全に中断されたが、1967年に関が復帰し、自ら脚本を考え胡鵬と組んで再び黄飛鴻映画を作り始めた。これをきっかけに、1968、1969年の二年間、計9本を上映させたが、監督はすでに胡鵬ではなく、脚本家の王風が監督になり、さらに曹達華がキャストから外され、より若い俳優が起用された。主演は関徳興であり、黄飛鴻の儒侠のイメージが維持され、依然として仁恕や恭謙を強調している<sup>(81)</sup>。しかし、1950年代の黄飛鴻映画に比べると、何らかの変化を見せ始めた。

1960年代に黄飛鴻映画の数は減ったが、カンフー映画が全体的に衰退したわけではなく、却って非常に活発であった。有名な俠客小説の作家である金庸の作品をはじめ、新俠客小説を原作としたカンフー映画が多く作られた。これらの映画のストーリーは、1950年代に大量生産された黄飛鴻映画より遥かに豊富で多様性に富み、そして衣装や武器などに多くの工夫と創作力を込め、鑑賞性に優れている。また、製作技術においても、日本映画をはじめ海外の映画からカッティングなどを学び、黄飛鴻映画など多くのカンフー映画の撮影で経験を積み重ねた殺陣師による斬新なアイディアで殺陣シーンの迫力をさらに高めている<sup>(82)</sup>。中でも、劉家良と唐佳が考案したワイヤで役者を吊り上げ、重力を克服し空中で飛行できるようにする技術は画期的である<sup>(83)</sup>。こうした中、黄飛鴻映画も変化しなければならなかった。強くて威厳に満ちた師匠であることに変わりはないが、1950年代にほかの武館や流派からの挑戦だけを受けていた黄飛鴻は、北方からの武術家とも戦うようになった。さらに、日本の

柔道や西洋のボクシングないしタイの格闘技など、外国の武術の挑戦にも直面しなければならなくな<sup>(84)</sup>った。植民地の香港で作られた映画シリーズとしては、海外との接点ができたのが、あまりにも遅かったと言えよう。1966年に中国大陸で始まった文化大革命が香港に波及し、植民地制度への反対運動が激しくなる社会的環境の影響もあるであろう。しかし、こうして外国の武術家と戦うことで、黄飛鴻を民族の英雄として描こうとして、意図的にこれらの映画を作ったとは思えない。カンフー映画が大きく変わり進歩していく中で、取り残されないために観客の関心を惹く内容を取り入れただけである。1970年代にはテレビが普及し、黄飛鴻を主人公とするテレビドラマが多く作られた。ある作品では、黄は革命志士として、帝国主義の侵略へ抵抗し、北伐、新文化運動などに参加したという内容があり、関徳興はこれに不満を覚えて批判した<sup>(85)</sup>。かれの中では、黄飛鴻はやはりかの宝芝林で弟子を教え、広州の町でほかの武術家と交流し、仁恕と恭謙を持って挑戦に臨み、弱い人を助け、悪人を論し、やむを得なければ並はずれた実力で片付けるという市井の英雄であり、国家や民族を背負うなどは、かれの知っている黄飛鴻の歴史にはなく、あまりにも突飛であり、受け入れがたかったと思わざるを得ない。

1970年代に入り、黄飛鴻映画は二つの大きな問題に直面するようになった。まずは広東語映画が再び苦境に陥ったことである。1970年代初期の香港では、広東語映画の姿はほとんど消えた。その理由はいくつかあるが、広東語映画の製作が粗末であることと、よりレベルの高い台湾映画が歓迎されたこと、無料のテレビチャンネルができたこと、そして西洋教育を受けた世代が成長し英語の映画を好んだことなどが挙げられる<sup>(86)</sup>。そしてもう一つの問題は、関徳興の年齢である。70前後の年では、カンフー映画の主演を務めるのに体力的にかなり困難なのである。この問題を解決するには、黄飛鴻の弟子を主人公にし、ハイライトとして関徳興が演じる黄飛鴻に登場してもらう、またはほかの俳優を使って黄飛鴻の青少年時代を描く方法が考案された。中でも、頭角を現し始めた成龍が主演を



資料5 成龍主演の『酔拳』。人物は若い頃の黄飛鴻だが、上映する当時に流行した髪型をしている。(黄愛玲編『粵港電影因縁』、香港電影資料館、2005: 223)

務める『酔拳』(1978)が注目された。成龍のカンフーコメディの特色が鮮明に表現されているのである。この作品では、黄飛鴻が英雄の座から引き落とされ、大きな武館をもち、人望の厚い父の下におかれ、軽率で賢く、青臭い青年であり、多くの教訓を受けて自らの非を悟り、蘇乞児の指導で酔拳という素晴らしい拳法を身に付けた。この黄飛鴻には、関徳興の演じた黄飛鴻に見られる儒俠のかけらもない。そして、外形においては、映画が上映する当時の流行りで、成龍のトレードマークとも言える髪型はそのままであり、黄飛鴻映画より成龍映画と言った方が適切であるかもしれない。

この二つの解決法は、1980年代にも使われつづけた。1970年代後期から、武術を習う人が少なく、莫桂蘭の黄飛鴻国術団を含め、維持に苦しみ、閉めるしかない武館が続出して<sup>(87)</sup>いた。1970年代は香港経済が高度成長する時期であり、香港に生まれ育った新興の中産階級が形成しつつある時期でもあった。と同時に、香港で生活を営む人々がかつて持っていた「広東人」としての身分に対する自

己認識も薄れつつあった。武術の魅力が失われたというより、社会の変化によって武館が持っていた相互扶助のネットワークの役割がなくなり、社会的機能を失ったのであろう。

こうした情勢で、カンフー映画自身の発展もあり、黄飛鴻の映画のネタとしての利用価値も尽きたようである。1980年代には3本の黄飛鴻映画が作られた。その中で劉家良が監督を務める『武館』(1981)はカンフー映画の秀作とされてきたが、従来黄飛鴻映画を語るさい、それほど注目されなかった。だが、これは1949年からの黄飛鴻映画の伝統の一段落を告げる重要な作品であると指摘したい。

監督の劉家良は、前述のとおり林世栄の弟子の劉湛の息子で、劉湛から洪家拳を伝授され、いわば黄飛鴻の直系の弟子であり、また本人もこれを誇らしく思っている。劉家良は若い頃から黄飛鴻映画の端役を務め、黄飛鴻映画の伝統を熟知しているだけではなく、武館を開く父を持ち、武術界のことにも非常に詳しく、映画関係者でありながら、武術家でもある。それゆえに、かれは香港映画業界におけるもっとも重要な殺陣師でカンフー映画の監督として、ワイヤ技術をはじめさまざまな斬新なアイデアで香港のカンフー映画を引っ張っているが、武術への強いこだわりを持っている。カンフー映画は「必ず武術を第一にし」、映画の中の武術には「必ず拳理(武術の規律)がなければならない」と主張する<sup>(88)</sup>。香港映画での殺陣の変化について語るさい、かれは黄飛鴻映画から始まった殺陣を「武館的殺陣」と名付けた。ワイヤを使って俳優を飛ばしたり、派手なカッティングで誤魔化したり、CGを使ったり、さらに爆発シーンを使ったりし、観客の目や耳を刺激するのではなく、武術の基本を重んじ、変化万端の型の一つひとつははっきりさせ、そして適切なカッティングを施し、俳優の表情などとうまく合わせ、鑑賞性の高い映画にするのは「武館的殺陣」であるという<sup>(89)</sup>。胡鵬が考えた「真功夫」を思い出させる主張であろう。『武館』こそ、劉家良のこの主張を完全に示した映画であり、かれのもっとも自慢する作品である。

『武館』の主人公は若い時の黄飛鴻である。多くの弟子を抱えた武館を開く父・黄麒英に厳しく育てられてきた青年で、才能があって弟子仲間の間では並はずれた実力の持ち主で、将来を期待されるが、青臭さがあり負けず嫌いな性格で、数々の挫折を乗り越え、ついに武術の真義に辿りつくストーリーである。舞台は広州である。広州の武術界を我がものにしようとする野心家の武術家がおおり、勢力があって人望の厚い黄麒英の存在を好ましく思わず度々挑発するが、黄麒英がこれに乗らず、息子の黄飛鴻は若い勢いでしばしばその罠にかかる。ついに、黄麒英の諭しによって、黄飛鴻は武術家のあるべき姿を悟り、また挑発してきた武術家の挑戦に応じ、その助っ人として迎えられた北方の武術家と戦い、家伝の洪家拳でこれを破った。敗れた北方の武術家が黄飛鴻の腕と人格に感服し、黄麒英に向かって、黄飛鴻は必ず次の世代の広東武術家の第一人者になると言い残して去った。

この映画における黄麒英を黄飛鴻にし、黄飛鴻を梁寛にすれば、関徳興主演の多くの黄飛鴻映画によく見られる人物関係になるであろう。そして、劉家良はこ



資料6 『武館』の中で、劉家良が見せた華やかで壮大な広東醒獅のシーン。(『向動作指導致敬』、香港国際电影节協会、2006:56)

の映画の冒頭で、自ら解説を務め、武館同士の付き合いにおける広東醒獅の役割と扱い方について、詳しく長い説明をした。さらに、黄飛鴻とその親友の王隠林が、互いを相手とし、拳法を練習しながら一つひとつの型について簡単な解説をする。また黄麒英が黄飛鴻の下半身の安定さを試しながら、武術家としての心得を伝授する長いシーンがある。ほかに、武芸者の帯の締め方に関する習わしの説明をストーリーに織り込むことや、黄飛鴻と北方の武術家が尾道で戦うシーンで、道の広さに合わせて何種も拳法を使うことなど、非常に玄人的なアレンジが見られる。殺陣師として、武術家としての劉家良が、カンフー映画への強い思いをこの映画に思う存分込めたに違いない。そして、黄飛鴻映画とともに成長してきた黄飛鴻の直系の弟子として、黄飛鴻映画に対する理解をこの映画で示していると思われる。

とりわけ、映画の冒頭にある広東醒獅についての説明及び長々とした採青のシーンに多くの意味が込められている。先に触れたが、関徳興が主演を務める時期から、広東醒獅は黄飛鴻映画に多く登場し、目を惹く存在であった。その理由は広東醒獅が民俗芸能として面白いからだけではなく、武術との強いつながり及び武館同士の付き合いにおいて重要な役割を果たしているからである。南方武術に基づく激しくて華やかな振り付けを特徴とする広東醒獅は、主に武館によって伝承され、武館の顔ともいえ、大事に扱われている。映画の中で、北方からの武術家が初めて知人の武館に顔を出したときに、このような習わしを知らず獅子頭を手で触れようとするだけで、獅子頭を強奪するのだと武館のメンバーに誤解されて危うく殴られるところのシーンが、武館における広東醒獅の大切さを反映している。また、祭りや何らかの祝いがあるさい、武館同士は獅子頭と胴幕を被せ、醒獅を擬人化し、言葉を交わすことなく、醒獅の動きですべての意思を表して付き合う。中でも、採青は闘わずに強弱をつける方法のひとつである。採青は醒獅のハイライトとされ、下半身の安定性を特に重んじる南方武術に基づいた醒獅においては、型をきれいに決めながら高く掲げた青を取ることは舞い手の技量がすべて見られると思われ、非常に重視される。それゆえに、採青でそれぞれの武館の実力が試され、青の掲げる場所が高かったり支障が多かったりして、これを取らないで素通りすると笑われて武館のプライドが傷つくこともある。難しいところに置かれる青ほど賞金と賞品が多いため、祭りで取ったものを展示するのが武館の実力を誇ることである。<sup>(90)</sup>

広東醒獅のこうした役割は、朱愚斎の小説にも関徳興主演の黄飛鴻映画にも多く反映されており、またストーリーの要とされることも多かったが、『武館』のように時間を割いて説明したり壮大なシーンでその面白さを強調したりする例は、ほとんど見られない。これは、武館の姿が社会の変化とともに消えつつある香港におり、殺陣師で映画監督の劉家良ではなく、黄飛鴻の直系の弟子であり武館を開いた父を持って自らも武館と深いかわりを有する劉家良の、武館の伝統への強いこだわりと思入れを示したものであると言えよう。もっとも、黄飛鴻の名前を出さず、「武館」をタイトルにしたのも、その理由であるに違いない。

『武館』は、これまでの黄飛鴻映画の集大成とも清算とも言えよう。この映画が上映された後に、市井の英雄としての黄飛鴻はスクリーンから姿を消した。かれが再びスクリーンに上がったのは、10年後の1991年である。しかしこの時の黄飛鴻は、すでに市井の英雄ではなくなり、民族の英雄に変身した。

この変身を実現させたのは、徐克である。徐克は、香港ニューウェーブ映画を代表する監督の一人

であり、1951年にベトナムに生まれ、同年代の香港映画監督の中では、戦争を実際に見たことのあるただ一人かもしれないと言われる。15歳の時に香港に移住し、のちにアメリカのテキサス州に渡り、オースティン大学でテレビと映画の製作を学んだ。1977年に香港に戻り、1979年に監督としてデビューし、以来、香港映画界でもっとも個性的で創造力のある監督として、香港映画の重鎮として活躍している。<sup>(92)</sup> 香港電影資料館が主催した徐克の作品を議論する企画のタイトルが「剣嘯江湖」であるように、徐克はカンフー映画の監督として有名である。しかし、劉家良曰く、徐克のカンフー映画における殺陣は、「魂が空中を飛び回るようなもの」<sup>(93)</sup>であり、本物の武術とはあまり関係がない。徐克はいわば純粹培養の映画監督であり、かれにとって、武術は映画を作る手段であり目的ではない。こうした前提があったからこそ、黄飛鴻が早期の黄飛鴻映画で作られた「あるべき姿」から解放されたのであろう。

1991年に徐克の監督する『黄飛鴻』が上映され、ただちに黄飛鴻映画ブームを巻き起こした。1996年までの6年間に、計15本の黄飛鴻映画が次から次へと作られ、そのうち、徐克が監督または脚本、プロデューサーなどがかかわったのは8本である。徐克が作った黄飛鴻のイメージについて、次のような指摘がある。

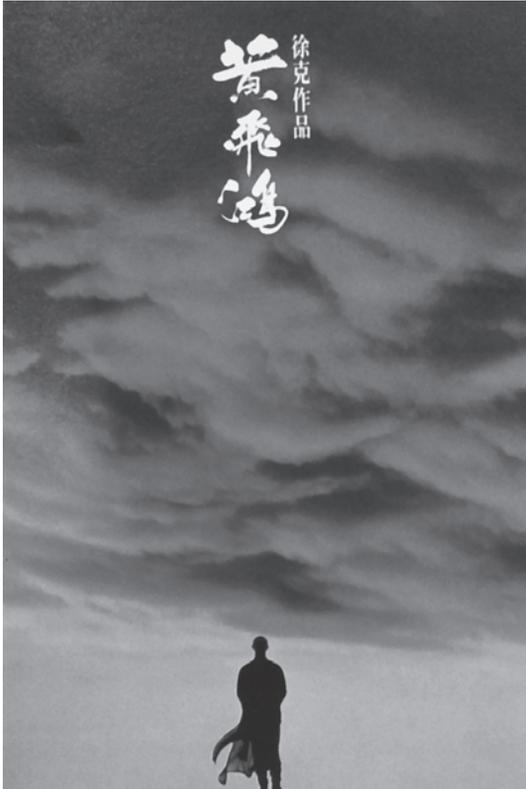
新しいバージョンの黄飛鴻は、広東の町の武術家から、清末に生き、西洋の列強の侵略に直面し、中国の進むべき方向を模索するために心を砕く民族の英雄に変身した。徐克は初めて中国の近代歴史の背景を英雄伝説のカンフー映画に取り込み、雄大な史詩の気魄を表現した人である。黄飛鴻は決然と民族の立場にたち、外国の侮辱に反抗して国粋を高揚させながら、自らの民族の悪い根性と世界に取り残された原因を反省し、西洋文化の優れたところを謙虚に受け入れる。<sup>(94)</sup>

こうしたイメージは、徐克の黄飛鴻映画の変わらない特色になっている。このような黄飛鴻を思いついたことについて、徐克は次のように振り返っている。

その時私は思った。我々の近代史に当たる清末民初は中国の政治において非常に激動の時代であったにもかかわらず、なぜ黄飛鴻は一人の英雄としてこれと全くかかわりがないのであろう。……その時の社会はあれほど揺れており、黄飛鴻はあれほど敏感な人だから、国を憂え、民を憂え、まったく反応しないわけには行かない。それで、かれを当時の歴史と結びつけようと思うようになった。台本を書くときに、突然潜在意識で中国人の想いや願望を映画の中で描き出した。色んなことで自強しなければならないという認識とイデオロギーは、映画の製作に取り組む私を前進させる感性的な力になっている。<sup>(95)</sup>

徐克は、この考えを映画だけではなくポスターにも凝縮して表現した。暗雲が立ち込める空の下に静かに佇む黄飛鴻は、小さいながら毅然かつ巍然としている。

この新しい黄飛鴻を演じるのに、徐克は北京出身の李連傑を選んだ。李連傑は少年時代から数多くの全国武術大会でチャンピオンを取ったプロの武術選手であった。1981年に、偶然の機会で香港の監督にスカウトされ、『少林寺』を主演して俳優になり、1989年に徐克が監督する映画で主演を務め



資料7 1991年の『黄飛鴻』のポスター。(黄愛玲編『粵港電影因緣』, 香港電影資料館, 2005: 223)

た。徐克は1980年代の中期から、黄飛鴻映画を作りたがっていた。かれは李連傑を選んだ理由について、こう述べている。

黄飛鴻は最初から最後まで、非常に家庭的である。ある男性を中心とする家庭であり、みなで「宝芝林」に住む。……そこで劉湛先生や、関徳興先生、石堅先生たちは、我々中国人の日常的话题、倫理上の话题を話す。……多く的人是リメイクしようと試みたが、よくできなかった。関徳興先生に取って代わることのできる人はいないからである。関徳興先生は我々の心に、あまりにも深い印象を残したのである。

李連傑と仕事を共にした後に、私の頭に一つの印象がすぐにできた。そうだ！李連傑も黄飛鴻になれる。なぜなら、実は黄飛鴻はかなり矛盾した人である。社交にあまり長けておらず、伝統を重んじて善良で、中国的な誠実さを持つ人である。

李連傑はこのような黄飛鴻になれる特色を持っている。黄飛鴻は英雄だから、外に出て人と接触しなければならぬし、「宝芝林」に帰ると弟子を叱ったりするという、伝統的父権の印象を与える人である。<sup>(96)</sup>

こうして、徐克は1970年代からの関徳興が年を取って黄飛鴻を演じられない問題と、真正面から対決した。李連傑を以て関徳興に取って代え、師匠としての黄飛鴻を映画の主人公とするのである。この発想がなければ、民族の英雄としての黄飛鴻は誕生しなかったであろう。なぜなら、半人前の青臭い青年は、自らの行動に責任を取って、さらにその影響力でほかの人を動かし、激動の時代に立ち向かうことができないからである。

徐克と李連傑が手を組んで創り上げた黄飛鴻は、30代前半とやや若い設定であるが、かれに関徳興の時代にも見られる家庭的で父権的な特徴が引き継がれている。かれの住む宝芝林に、梁寛もおり猪肉榮もおり、さらに牙刷蘇も入門している。しかし、この牙刷蘇は、あの法螺を吹き、弟子仲間に笑われる小柄な男ではなくなった。かれはアメリカで西洋医学を身につけ、中国の伝統医術に魅せられ、名医の黄飛鴻の下にやってきたのだ。この牙刷蘇は、辮髪を切った頭にハットを被り、中国の長衣の上に背広を羽織り、中国語より英語の方が自由に話せる。さらに、関徳興の黄飛鴻映画にないもう一人の人物が加えられた。黄飛鴻の亡き母の義妹で、西洋で長く生活して帰国した若い女性で、黄飛鴻の恋の相手である十三姨である。彼女はいつも洋服を身に纏い、英語ができ、素直で世間知らず、新しいものに強い興味を持つ。この二人は、伝統的な雰囲気漂う宝芝林にとって、かなり異色の存在であるが、黄飛鴻に海外、引いて西洋文明との接点を持たせる存在でもある。この二人を通

して、黄飛鴻は英語を少し覚え、カメラを知り、蒸気機関を知り、さらにアメリカに戻った牙刷蘇を訪ねるために海を渡った。そして、黄飛鴻は広州を離れさせられ、武術の伝統を誇る仏山に移住し、「仏山黄飛鴻」と自称し始めた。

こうして生まれ変わった黄飛鴻は、まず北方からの武術家に挑戦されたが、いかに挑発されても応戦しないという、関徳興の黄飛鴻を思い出させる儒侠のイメージでスクリーンに姿を現した。しかし、ストーリーは、イギリス人が中国の東南沿海で拠点を作り、労働力を求めるアメリカへ中国人を売ろうと企む背景のもとで展開する。映画のハイライトは、黄飛鴻が騙されて監禁された中国人を救うために、命をかけて激しい戦いを繰り広げた末、イギリス人の陰謀を挫いたところである。まさに民族の英雄そのものの行いであろう。

この作品は大きな反響を呼んだ。いったん忘れられたような黄飛鴻は、再び注目されるようになった。しかし、すべての人が納得できる映画ではない。まったく歴史の根拠がなく、でたらめばかりと指摘する観客がいる。<sup>(97)</sup> 関徳興がこの映画を見て、言葉を失い呆気にとられたという。<sup>(98)</sup> 英語を喋る牙刷蘇と洋服を着て黄飛鴻に恋慕う若い女性は、黄飛鴻に己と混同してしまうほど強い思い入れを持つ関徳興にとって、確かに受け入れられない存在なのであろう。

批判されたのは牙刷蘇と十三姨だけではない。殺陣も多くの不満を招いた。まずは李連傑の武術である。李連傑は全国武術チャンピオンであるが、競技化した武術は対戦して勝負を決めるものではなく、一定の規律で型を編み、これを実演して採点で強弱を決めるものである。それゆえに、李連傑の武術は鑑賞性に富むもので、力はやや弱い、体を大きく伸ばしてリズム感があり、これまでのいづれのカンフースターの武術よりも目で楽しめる、徐克が評価している。<sup>(99)</sup> だが、実際の黄飛鴻をはじめ、武館を開く人は常に技比べをし、さまざまな挑戦に直面している。黄飛鴻の意見を直接知ることにはできないが、咏春拳の大師である葉問が残したメモに、「技比べて負けても気にすることなし」という一行があり、<sup>(100)</sup> 武術界の人にとっては、技比べは日常茶飯事であることがわかるであろう。それゆえに、黄飛鴻らの武術はかなり実戦的であるが、見た目が良くない。劉家良ら武館と縁のあった殺陣師の意見では、鑑賞性のためならアレンジはするが、「拳理」がなければならない。とりわけ黄飛鴻映画の殺陣に、劉家良は非常に厳しい。徐克は最初にこの映画の殺陣を劉家良とその弟に頼もうとしたが、ワイヤを使いたいと伝えると反対された。また、劉によれば足を高く蹴り上げるなど派手な型も使えない。その理由は、黄飛鴻がこれらの流派の型を使うと笑われるからである。互いに譲らない結果、徐克は袁和平という殺陣師に仕事を頼んだ。袁和平には流派の観念がなく、頼まれたとおりに殺陣を考案するからである。<sup>(101)</sup> こうして、徐克のアイディアで、袁和平がアレンジした大掛かりの殺陣シーンは実現され、観客を魅了した。

しかし、ワイヤ技術を最初に考案した劉家良だが、仕事を引き受けないほどにこれを使用するのに反対したのは、不思議に思うであろう。実際のところ、徐克が監督し、劉は殺陣師を務めるほかの映画では、多くのワイヤを使う殺陣シーンが見られる。劉家良にとっては、ほかの人を飛ばすのは良いが、黄飛鴻だけは飛ばしてはいけないことが明白である。

こうした結果をもたらしたのは、劉家良と袁和平が個人的に違うポリシーを持つことだけではない。そこには数十年にも亘った香港映画の殺陣師の歴史がある。「南北拳師」と言われる南派の殺陣師と北派の殺陣師が互いに協力しながら対抗する歴史である。劉家良の父の劉湛と同じように、袁和

平の父の袁小田も最初から黄飛鴻映画にかかわってきた、香港のカンフー映画におけるもっとも重要な殺陣師の一人である。しかし、袁小田は多くの黄飛鴻映画で、北方から流れてきてさまざまな縁で黄飛鴻と接点を持った武術家を演じたように、かれは広東人ではなく武館ともまったく縁がなかった。袁の殺陣は中国の伝統演劇から脱胎したものであり、こうした殺陣は「舞台北派」または「北派」と言われ、その殺陣師は出身地にかかわらず、「北派拳師」、「龍虎武師」と言われる。これに対して武館で伝わる南方武術に基づいた殺陣は「南派」と言われ、劉家良によれば「武館的殺陣」、「功夫的殺陣」とも言われ、その殺陣師は「南派拳師」である。両者の違いについて劉家良はこう述べている。「功夫的殺陣は北派と違う。かれらは姿勢が良く見た目が良く、功夫は固いのだ」<sup>(102)</sup>。映画はまず見せるために作られたものであるがゆえに、袁小田をはじめ多くの北派の殺陣師やスタントマンがその見た目の良い殺陣を以て早期から黄飛鴻映画にかかわってきた。また、南派と北派の殺陣師は、互いの長所を学んで協力し香港のカンフー映画の発展に貢献してきた。劉家良とともにワイヤ技術を考案した唐佳は北派の殺陣師である。しかし、いかに協力してきたと言っても、融合するまでにはいかなかった。黄飛鴻のことになるとその違いが一層はっきりとなった。武館の伝統に強い思い入れのある劉家良が固く反対することは、父親の代から武館にかかわりを持たない袁和平にとってまったく問題にならないのである。また、徐克が、黄飛鴻の流れを汲んだことを誇りに思う南派の劉家良が引き受けられない仕事を、武館の伝統や武術の流派にこだわらない北派の袁和平に頼んだことは、かれがこれまでの黄飛鴻映画と決別し、新しい黄飛鴻を作る固い意志を示したと言ってもよからう。そして、自他ともに認める香港の映画界における殺陣師の第一人者である劉家良が、これほど強く反対しても黄飛鴻を飛ばすことを阻止できなかったことは、スクリーンに生き続けてきた黄飛鴻は、すでにその町の中で武館を開いて弟子を束ねる市井の英雄としての歴史的使命を終えたことをはっきりと告げたのである。

反対の意見があるにもかかわらず、この映画は大きな成功をおさめた。また、1994年に香港映画の中国大陸での上映が解禁され、徐克の黄飛鴻は映画とともに中国全土に知れ渡るようになった。それから、黄飛鴻は徐克の映画では、広州で白蓮教と戦って孫文を助け、北京で広東醒獅の技で外国人の前で中国人の面目のために苦闘し、番禺で海賊を打ち破って民を救い、最後には牙刷蘇を訪ねてアメリカに渡り、中国人の尊厳のために戦った。舞台はどこであれ、黄飛鴻は民族の英雄でありつづけることに変わりがない。さらに、このブームに乗じほかにも黄飛鴻映画が作られたが、いずれも何らかの歴史事件と結びついて、黄飛鴻の年齢や家柄はまちまちだが、国家民族のために戦うことになっている。すでに国際的スターになった成龍でさえもまた、1994年に黄飛鴻映画に主演した、『酔拳Ⅱ』である。前作と同じようにカンフーコメディで、黄飛鴻は相変わらず半人前の青年だが、中国の国宝を盗んで海外へ持ち出そうとする西洋人を相手に戦う。また大物歌手の譚詠麟が主演するコメディ映画の『黄飛鴻笑伝』(1992)では、全く武術ができない黄飛鴻だが、アヘンを中国人に売り込もうとする西洋人の陰謀を砕いた。

いずれにせよ、「民族の英雄」は、すでにスクリーンに生きる黄飛鴻において揺るぎない特徴になったのである。

## おわりに

実際の人物でありながら、オーソドックスな歴史学には認められずにスクリーンに生きる英雄の黄飛鴻の誕生は、偶然でもあり必然の結果でもあることを、以上の記述で明らかにした。

黄飛鴻が多くの広東の武術家の中から選ばれたことには、歴史的、社会的背景がある。出自においても、経歴においても、または人格においても、かれは抜きんでて偉大な武術家であることを証明できる資料は、管見の限り存在しない。むしろ、かれは武術界に身をおき、武館を開いて弟子を抱える人の代表として、武術家の理想像をスクリーンで見せていると言えよう。そして、この理想像には、映画の監督や俳優などの、武術界以外の人々の理想や願望も加えられ、かれはさらに理想化され、中国の伝統的倫理観念を示した儒俠になったのである。

黄飛鴻を理想化することは、かれを儒俠にしたところで止まるわけではない。時代の価値観に変化があると、黄飛鴻への再理想化もまた行われ、そのイメージに変化をもたらす。徐克の手によって黄飛鴻は民族の英雄に変身したが、このイメージを固定化したのは大陸市場であろう。1990年代は、天安門事件の洗礼を受けた中国にとって、自らを再認識する時期であったからである。これを議論する紙面はないため、次の機会を期したい。

## 注

- (1) 中国における南方獅子舞の代表的な一つで、清代初期に、仏山に起源したとされる。主に中国の広東省、広西チワン族自治区の東南部、香港、マカオに分布しており、海外の華人社会でも広く行われており、華やかな獅子頭や胴幕及び武術に基づいた激しい振り付けなどの特徴を持っている。
- (2) 「不滅の黄飛鴻」, 「電影口述歴史展覧之『再現江湖』」, 香港電影資料館, 1999: 36.
- (3) 「黄飛鴻大事年表」, 仏山黄飛鴻記念館の解説.
- (4) 当時広州を本拠地とする孫文の中華民国政府に対抗した広東商団による反乱であり、1924年10月10日に勃発し、15日に鎮圧された。(蔣祖縁・方志欽ほか編『簡明広東史』, 広東人民出版社, 1987: 653-655)
- (5) 何泳珠整理「南海黄飛鴻伝略」, 広東省南海市政協文史和学習委員会編『南海文史資料第31輯・南海黄飛鴻伝』, 1998.10: 1-11; 鄧富泉『俠医黄飛鴻』, 作者個人出版, 2007: 15-24 など.
- (6) 黄飛鴻は「広東十虎」の一人であるとも言われる。「広東十虎」とは、普段、鉄橋三、蘇乞児、王隠林、鄧泰、蘇黒虎、黄澄可、黄麒英(黄飛鴻の父)、黎仁超、鉄指陳及び譚濟筠の十人をいうが、鄧泰ではなく黄飛鴻が数えられる説もある。(鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 11 など)
- (7) いずれも中国語簡体字での検索結果.
- (8) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 15.
- (9) 同上: 124.
- (10) 余慕雲「黄飛鴻映画の源流」, 香港電影資料館『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』, 香港市政局, 1996: ページ数なし.
- (11) 蒲鋒「飛鴻那復計東西——黄飛鴻電影的転変歷程」, 黄愛玲編『粵港電影因縁』, 香港電影資料館, 2005: 214-225.
- (12) 広州市地方志編纂委員会『広州市志・体育志』, 広州出版社, 1997: 22-23.
- (13) 何泳珠整理前掲「南海黄飛鴻伝略」, 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』など.
- (14) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 18-21.

- (15) 「黄飛鴻落選広東歴文化名人 其徒弟林世栄入選」, 中国新聞社仏山支社 2007 年 6 月 2 日ニュース.
- (16) 同上.
- (17) 馮植「創建黄飛鴻獅芸武術館の経過」, 前掲『南海文史資料第 31 輯・南海黄飛鴻伝』: 190.
- (18) 前掲「黄飛鴻落選広東歴文化名人 其徒弟林世栄入選」.
- (19) 「編者の話」, 前掲『南海文史資料第 31 輯・南海黄飛鴻伝』: 3.
- (20) 「抗倭事跡不虛 黄飛鴻入百賢榜」, 『南方都市報』, 2007.10.10: A35.
- (21) 同上.
- (22) 黎秀焯「朱愚齋筆下の黄飛鴻」, 前掲『南海文史資料第 31 輯・南海黄飛鴻伝』, 1998: 78-80; 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 19-20 など.
- (23) 前掲「抗倭事跡不虛 黄飛鴻入百賢榜」.
- (24) 同上.
- (25) 余慕雲前掲「黄飛鴻電影的源流」: ページ数なし.
- (26) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 22.
- (27) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 23-24.
- (28) 如是「閑話黄飛鴻」, 前掲『南海文史資料 31・南海黄飛鴻伝』: 135.
- (29) 黎秀焯前掲「朱愚齋筆下の黄飛鴻」: 29-31.
- (30) 蒲鋒前掲「飛鴻那復計東西 —— 黄飛鴻電影的轉變歷程」: 215.
- (31) 同上.
- (32) 黄飛鴻題材の小説を書いた作家は 11 人おり, 作品は計 20 冊あるという. (仏山黄飛鴻記念館の展示解説)
- (33) 胡鵬『我與黄飛鴻』, 作者個人出版, 1995: 3-4.
- (34) 中国語では, 一般的に「武俠片」という. 香港をはじめ, 広東語区では「功夫片」ともいい, または「功夫武俠片」などの言い方もある. これは武術にかかわる映画だけを意味し, アクション映画には「動作片」という言い方があり, はっきり区別している. 本稿では, 「武俠片」, 「功夫片」, 「功夫武俠片」などを, 統一して「カンフー映画」と言う.
- (35) 余慕雲「粵語武俠片的初歩研究」, 香港国際電影節『香港武俠電影研究』, 香港市政局, 1981: 87-88.
- (36) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』: 5.
- (37) 韓燕麗「従国防片的製作看早期粵語電影和中国大陸的關係」, 黄愛玲編前掲『香港電影因縁』: 56.
- (38) 鍾宝賢『香港百年光影』, 北京大学出版社, 2007: 118-122.
- (39) 余慕雲前掲「粵語武俠片的初歩研究」: 89; 鍾宝賢前掲『香港百年光影』: 120.
- (40) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』: 6.
- (41) 同上.
- (42) 余慕雲前掲「粵語武俠片的初歩研究」: 89.
- (43) 鍾宝賢前掲『香港百年光影』: 127.
- (44) 同上: 125.
- (45) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』: 6.
- (46) 同上.
- (47) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』: 23.
- (48) このノートは, 仏山の葉問堂で展示されている. 葉問は梁贊の又弟子で, 香港で武館を開き咏春拳法を教えており, カンフースターのブルース・リーの師匠であり, 打撲の名医でもある.
- (49) 清代の初期から民国までの間に, 広州と仏山を中心に, 広東語区における労働者による業界組合である. —— 筆者注
- (50) 康熙 50 年 (1711) に統計した人口で「丁銀」という住民税の総額を算定し, これを田地に対して課する租税である田賦と統一して徴収するという, 清代における税制である. 康熙 55 年 (1716) に広東省で最

- 初に試行し、次第に全国各地で実行された。この税制の下で、課税される人口が固定され、人が増えても税金の負担が増えず、客観的に人口の増加をもたらした。また、地方の役所によって一人ひとりの住民からは税金を徴収せず、実際的に人口の自由な移動が許され、労働力の自由移動を可能にした。(蔣祖縁・方志欽ほか編前掲『簡明広東史』:306-331)
- (51) 彭偉文『広東醒獅の伝承者集団に関する社会史的考察——民衆エネルギーの動と静——』, 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2010 年度博士論文, 未公刊:32-60.
- (52) 黎秀煊前掲「朱愚齋筆下の黄飛鴻」:133.
- (53) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』:21.
- (54) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』:19-24.
- (55) 同上; 鍾宝賢前掲『香港百年光影』:130.
- (56) 中国語では「粵劇」という。
- (57) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』:9.
- (58) 同上.
- (59) 同上.
- (60) 鍾宝賢前掲『香港百年光影』:29.
- (61) 「黄飛鴻電影片目」, 香港電影資料館前掲『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』:ページ数なし.
- (62) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」:38.
- (63) 鍾宝賢前掲『香港百年光影』:123.
- (64) 香港ドル。胡鵬によると、当時には、会社によって監督に出す報酬がまちまちで、その多くは500元から4000元の間であるが、特に有名な監督なら、10000元前後の報酬をもらえる例もある。(鍾宝賢前掲『香港百年光影』:123-124)これを標準にすれば、名優である関徳興にとって、4000元は確かに高い報酬と言えなからう。
- (65) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」:38.
- (66) 余慕雲「序」, 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』.
- (67) 余慕雲『香港電影八十年』, 香港区域市政局, 1997:30.
- (68) 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』:138.
- (69) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』:148.
- (70) 同上.
- (71) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」:59.
- (72) 『向動作指導致敬』, 香港国際電影節協会, 2006:53.
- (73) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」:59.
- (74) 如是前掲「閑話黄飛鴻」:135-137; 黎秀煊前掲「朱愚齋筆下の黄飛鴻」:54. また、もともと黄飛鴻本人が三欄教頭を務めていたが、愛弟子の梁寛は一人前になり、これを梁に譲ったという説もある。(鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』:17-18).
- (75) 何泳珠整理前掲「南海黄飛鴻伝略」, 鄧富泉前掲『俠医黄飛鴻』など.
- (76) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」:70.
- (77) 鍾宝賢前掲『香港百年光影』:130.
- (78) 羅卡「黄飛鴻家族」, 香港電影資料館前掲『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』:ページ数なし.
- (79) 胡鵬前掲『我與黄飛鴻』:19-28.
- (80) 「黄飛鴻電影片目」, 香港電影資料館前掲『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』:ページ数なし; 蒲鋒前掲「飛鴻那復計東西——黄飛鴻電影的轉變歷程」:220.
- (81) 「黄飛鴻電影片目」, 香港電影資料館前掲『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』:ページ数なし.
- (82) 余慕雲前掲「粵語武俠片的初步研究」:92-97.
- (83) 鍾宝賢前掲『香港百年光影』:130.

- (84) 蒲鋒前掲「飛鴻那復計東西——黃飛鴻電影的轉變歷程」：220.
- (85) 吳昊「黃飛鴻之英雄三變」，香港電影資料館前掲『仁者無敵——黃飛鴻電影欣賞』：ページ数なし.
- (86) 鍾寶賢前掲『香港百年光影』：177.
- (87) 鄧富泉前掲『俠醫黃飛鴻』：147.
- (88) 前掲『向動作指導致敬』：52.
- (89) 同上：53.
- (90) 廣東醒獅を舞いながら，わざと難しく設置された賞金や賞品を取ることである．賞金や賞品の多くはレタスとともに設置されるがゆえに，「青」というが，必ずレタスとは限らない．（彭偉文前掲『廣東醒獅の伝承者集団に関する社会史的考察——民衆エネルギーの動と静——』：51）
- (91) 彭偉文前掲『廣東醒獅の伝承者集団に関する社会史的考察——民衆エネルギーの動と静——』：第一章.
- (92) 竇欣平『劍嘯江湖——徐克的世界』，中国広播電視出版社，2007：2-3；卓伯棠『香港新浪潮電影』，天地圖書有限公司，2003：101.
- (93) 前掲『向動作指導致敬』：53.
- (94) 李焯桃「百變徐克與香港電影的互動」，『劍嘯江湖——徐克與香港電影』，香港電影資料館，2002：8.
- (95) 前掲「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」：43.
- (96) 同上.
- (97) 如是「閑話黃飛鴻」，前掲『南海文史資料 31・南海黃飛鴻伝』：135-136.
- (98) 黃霑口述，衛靈整理「愛恨徐克」，前掲『劍嘯江湖——徐克與香港電影』：121.
- (99) 竇欣平前掲『劍嘯江湖——徐克的世界』：135-136.
- (100) 葉問堂に展示される葉問の手書きメモ.
- (101) 黃岳泰口述，衛靈整理「幹嗎我們還可以合作？」，前掲『劍嘯江湖——徐克與香港電影』：129.
- (102) 前掲『向動作指導致敬』：53.
- (103) 鍾寶賢前掲『香港百年光影』：358.

## 参考文献

何泳珠整理

1998 「南海黃飛鴻伝略」 廣東省南海市政協文史和學習委員會編『南海文史資料第 31 輯・南海黃飛鴻伝』 pp. 1-11, 仏山：内部出版.

韓燕麗

2005 「從国防片的製作看早期粵語電影和中国大陸的關係」 黃愛玲編『粵港電影因縁』 pp. 56-67, 香港：香港電影資料館.

広州市地方志編纂委員会

1997 『広州市志・体育志』 広州：広州出版社.

黃岳泰口述，衛靈整理

2002 「幹嗎我們還可以合作？」『劍嘯江湖——徐克與香港電影』 pp. 128-131, 香港：香港電影資料館.

黃霑口述，衛靈整理

2002 「愛恨徐克」『劍嘯江湖——徐克與香港電影』 pp. 116-121, 香港：香港電影資料館.

胡鵬

1995 『我與黃飛鴻』 香港：作者個人出版.

鍾寶賢

2007 『香港百年光影』 北京：北京大学出版社.

卓伯棠

2003 『香港新浪潮電影』 香港：天地圖書有限公司.

中国新聞社仏山支社

- 2007.6.2「黄飛鴻落選広東歴文化名人 其徒弟林世栄入選」, 仏山：中国新聞社仏山支社.
- 竇欣平  
2007 『剣嘯江湖——徐克の世界』北京：中国広播電視出版社.
- 鄧富泉  
2007 『俠医黄飛鴻』香港：作者個人出版.
- 如是  
1998 「閑話黄飛鴻」広東省南海市政協文史和学习委員会編『南海文史資料31輯・南海黄飛鴻伝』pp.135-144, 仏山：内部出版.
- 馮植  
1998 「創建黄飛鴻獅芸武術館の経過」広東省南海市政協文史和学习委員会編『南海文史資料31輯・南海黄飛鴻伝』pp.190-193, 仏山：内部出版.
- 彭偉文  
2010 『広東醒獅の伝承者集団に関する社会史的考察——民衆エネルギーの動と静——』横浜：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科2010年度博士論文.
- 蒲鋒  
2005 「飛鴻那復計東西——黄飛鴻電影的轉變歷程」黄愛玲編『粵港電影因縁』pp.214-225, 香港：香港電影資料館.
- 香港国際電影節協会  
2006 『向動作指導致敬』香港：香港国際電影節協会.
- 香港電影資料館  
1996 『仁者無敵——黄飛鴻電影欣賞』香港：香港市政局.
- 香港電影資料館  
1999 「不滅的黄飛鴻」「電影口述歴史展覽之『再現江湖』」pp.36-39, 香港：香港電影資料館.
- 余慕雲  
1981 「粵語武俠片の初步研究」香港国際電影節『香港武俠電影研究』pp.87-98, 香港市政局.
- 李焯桃  
2002 「百変徐克與香港電影的互動」『剣嘯江湖——徐克與香港電影』pp.2-11, 香港：香港電影資料館.
- 李培  
2007.10.10「抗倭事跡不虛 黄飛鴻入百賢榜」『南方都市報』pp.A35, 広州：南方都市報社.
- 黎秀煊  
1998 「朱愚齋筆下の黄飛鴻」広東省南海市政協文史和学习委員会編『南海文史資料31輯・南海黄飛鴻伝』pp.29-134, 仏山：内部出版.